

# アジアで がんを生き延びる

人類の進歩にとって  
がんはどんな意味をもっているのか？

正解のない問いである

人類の難問としての

「がん」という共有の試練を抱え

アジアがともに生き延びるために

いまだどんな眼差しをもちたいのか

過去をみつめて 未来を紡ぐ

いまこそ学際知が試されている

## 夏学期講義日程

科目番号 4990180 31M220-1314S 31D220-1314S

月曜日4限 14:55~16:40 医学部教育研究棟第1セミナー室 他(7/10 福武ホール)

担当教員：東京大学大学院 情報学環・学際情報学府

「総合癌研究国際戦略推進」寄附講座 特任教授 赤座 英之

### 学びの視点を考える

4/10 私たちの未来はどこに向かうのか 学際研究とアジアのがん

吉見 俊哉 [東京大学 教授]

4/24 質的研究への批判的評価と対応

「エッセイ」とみなされないための課題とは？

波平 恵美子 [お茶の水女子大学 名誉教授]

5/8 ポスト・トゥルース時代の医療経済 真実とどう向き合えばよいのか？

五十嵐 中 [東京大学 准教授]

### アジアの癌医療の現状と課題

5/22 Cross-boundary Cancer Studies アジアの今を映し出すがんという病

赤座 英之 [東京大学 特任教授]

5/29 社会課題とイノベーション がん免疫薬「オプジーボ」の逆転の発想

粟田 浩 [小野薬品工業株式会社 取締役副社長執行役員 開発本部長]

6/12 医食同源の未来

食とは何か？あなたは癌予防にどれだけ真面目に取り組めますか？

平野 宏一 [株式会社ヤクルト 本社執行役員]

### 現実世界と研究世界の邂逅

6/19 アジアの食と文化とやまいと 人類はなにをたべてきたのか

服部 幸應 [学校法人服部学園 理事長]

6/26 アジアの地域コミュニティの中のがん

いのちのかなしみとひとの縁

河原 ノリ工 [東京大学 特任講師]

7/3 国際保健の中のがん

Global Agenda はどのようにしてつくられるか？

中谷 比呂樹 [慶應義塾大学 特任教授]



服部 幸應

### 世界の構造を見つめる

7/10 特別授業

日本・アメリカ・アジア 国際社会で生き延びること

藤崎 一郎 [上智大学 特別招聘教授 前米国駐新特命全権大使]

鼎談 ーいま私たちはどんな時代を生きているのか？

藤崎 一郎 × 吉見 俊哉 × 赤座 英之



藤崎 一郎

7/24 学生発表

(敬称略)

がんというアジアの喫緊の共有課題を通して、高齢化、経済格差、死生観の変容、グローバリズムとナショナリズムのねじれ、などアジアの今日的な課題が浮かび上がってくる。本講義は、がんを医学はもとより、政治・経済・文化など様々な領域から捉えてみることを通して、世界の内実を読み解くことを学問的考察の端緒とする「Cross-boundary Cancer Studies」という学際連携プログラムに位置づけられている。研究とは自らの問題意識を丁寧に育てていくことであり、学際知として立ったとき、自らの拠って立つ研究の足元が相対化されるはずである。

○冬学期に本授業と連動した授業を開講予定 ITASIA128 Surviving Cancer in Asia

### 連絡先

東京大学大学院 情報学環・学際情報学府「総合癌研究国際戦略推進」寄附講座

赤座研究室 TEL. 03-5452-5343

担当 特任講師 河原ノリ工 E-mail norie.kawahara@med.rcast.u-tokyo.ac.jp

www.siccn.org

# アジア × がん

がんは文明病といわれる。人類は病と闘い生き延びる手立てを探してきたが、経済成長目覚しいアジアにおいては、皮肉にも、感染症の克服により手に入れた高齢化が最大のリスクとなりがんが急増している。グローバル化の波にさらされて経済格差が拡大しているなか、がんはアジアの人々の暮らしに深い影を落としはじめている。

「近くて遠い」と言われてきたアジアは、日本にとって内なる自己として自らを省みさせる存在であり、また絶対的な他者としても屹立してきた。アジアとどう向き合っていくべきなのか、アジアの今の実像を浮かび上がらせるがんという重い課題を架橋としておいてみたとき、それはどんな意味をもつ問いなのか？

オムニバス形式の講義ではがんを医学はもとより、政治、経済、文化など様々な領域から捉える探求を軸として日本とアジアのありようを読み解いていく。

研究とは自らの問題意識を丁寧に育てていくことである。受講者は、アジアのがんという事象に対峙して各テーマごとに深掘りされていく場所へ降りていくことで、自らが寄って立つ研究の相対化を促される仕掛けともなっている。

アクチュアルな知の課題を内包した問いを学際的に繋いでいく知が、アジアの未来を生き延びる智慧を紡いでくれるだろう。

## 参考図書



アジアでがんを生き延びる  
赤座 英之／河原 ノリエ 編  
東京大学出版会 2013年4月刊



Surviving Cancer in Asia:  
Cross-boundary Cancer Studies,  
The University of Tokyo, JJCO

研究とは、自らのなかにある問題意識を丁寧に育てていくことです。

「アジアのがん」という、あなたの研究課題とは異なる分野との遭遇のなかで

あなたが進もうと考えている専門分野のありようが相対化されてみえてくるはずです。

本講座は、オムニバス形式の講義で、がんを医学はもとより、政治、経済、社会など様々な領域から捉える問いへの探求を軸として、日本とアジアの未来のありようを読み解いていく講義です。 詳細は下記を参照ください。

<http://siccn.org/156.html>

今回は、波平恵美子先生から、「質的研究はエッセーなのか？」という、文系の学びの場にいるものにとっての永遠の課題ともいえるべき事柄への学知の在り方についての講義です。

## 「アジアでがんを生き延びる」

-質的研究への批判的評価と対応：「エッセイ」とみなされないための課題とは-

波平恵美子

医療人類学/文化人類学

お茶の水女子大学名誉教授

### 【講義レジュメ】

「疾病」は自然科学の一分野としての医学の対象である。人間の存在をあくまで生物体として、現在では遺伝子レベルに至るまで分析の対象として総合的に研究し、その結果として、身体における「異常」や「逸脱」を「疾病」とする。

しかし、存在者としての個々の人間にとっては、生きていることは身体をとおしての経験そのものであり、「疾病」もまた経験である。この「経験としての病」は自然科学の対象になりにくい。痛みや不安や不快感、社会活動ができないことからくる疎外感などは数値化することができない。様々な手法を用いて数値化したとしても常にそこにはあいまいさや解釈のずれが生じる。そこで、「経験としての病」を対象とするときには現象を数値化しない「質的研究」が用いられることになる。

「質的研究」は、1980年代にはじまり2000年題に入り一層その重要性に注目されるようになっていく。しかし、自然科学を主流とする健康科学の世界では、質的研究はその手法がわかりにくいこともあり、時には「思い付き」「エッセイ」とみなされることさえあり、その実証性、客観性が認められないことが多い。重要性を認めつつも、その研究としての存在を疑われるのはなぜか、それを避けるにはどのような方法があるかについて述べる。

### 【講義資料】

波平恵美子『質的研究 Step by Step』、第2版、2016年、医学書院  
第6章、pp97～119